

文語の苑

メールマガジン第二十七号（平成二十五年九月）

終戦記念日に思ふ

昨今の中国の脅威を前にして日米の絆は強化せざるべからず。されど第二次大戦中に米中間に醸成せられたる絆の未だ風化せず存するを忘るべからず。この後者の絆には日本国内にも同調する向きあり。

大戦の終結するに当たり米国は戦後の占領政策を確固たるものとすべく、米国の日本支配に利益を見出す勢力を育てこれを新しき日本の支配層となせり。戦前の日本において謂はば日陰の立場に在りし政治家、学者、評論家時を得て古き日本の全面的否定に走り、米国に協力す。彼等の思想的原点は東京裁判史観及び新憲法なり。

新興国家勃興するに当たり国内矛盾を解決するため対外膨張政策をとることは古今東西その例枚挙に遑なし。これ謂はば物理現象に近く、欧米列強も過去にその経験を有し、現に中国もその誘惑に駆られつつあり。倫理的是否を問ふべき種類のものに非ず。然るに第二次大戦においては勝者は敗者を悪と断じ、その価値観を受諾することを強要せり。遺憾ながら敗戦後既に半世紀を閲するも未だ多くの日本人はその呪縛下にあり。

戦前の日本と同じ道を歩みつつある中国の威丈高になりて戦前の非を鳴らすに、米国はその潜在意識においてこれに同調する所なしとせず。

古き日本全面否定の思想は我国の正常化を妨ぐるのみならず、真の日米同盟のためにならず。

先に「終戦のエンペラー」なる映画を観る機会ありき。天皇の戦争責任をめぐるマッカーサー及びその副官フェラーズ准将の動きをテーマとせるものなり。東京裁判の論理によらば当然断罪せらるべき天皇を訴追せざりしは優れて現実的かつ冷徹なる判断に基くものなりき。現在の米国の政治家同レベルの-high政治的智慧和有さば、西太平洋地域における平和の将来につき案すること更になし。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第二十七号

小倉百人一首 二十六 藤原道綱母

嘆きつつ一人寝る夜の明くる間は いかにか久しきものとかは知る

藤原道綱母として知られるこの歌の作者は、『蜻蛉(かげろふ)日記』の著者で、藤原家の、あの菅原道真を蹴落とした時平の、叔父になる高経の曾孫に當ります。若いころから才気と美貌で知られ、結婚した夫は、当時最高の政治家、兄と争ひ(い)ながら藤原氏のの上になり、関白にもなった藤原兼家です。兼家は他の妻との間にも男子を何人か設け、その一人が藤原氏全盛期の道長ですが、この作者の子の、あまり有能な政治家ではなかったと言はれる道綱も、名前に同じ「道」の字が付く、道長の兄弟です。『蜻蛉日記』は、兼家と別れてから、結婚生活の始終を記したものです。感受性が強く、ヒステリー気味の自己顕示型女性が、包容力のある大人物である夫を、何とか自分に振向かせようとした心理的驅引きを、縷々と綴ります。「嘆きつつ」の歌は、作者が夫に送った歌です。

昭和の作家堀辰雄に、『かげろふの日記』といふ(う)小説があります。この小説は独立した現代の小説ですが、その中で、古典の『蜻蛉日記』の現代語訳を試みて居ります。そこから、この歌の詠まれた経緯を書いたところを引用しませ(しよ)う。

或夕方、急に「どうしても往かなければならないところがあるから」と仰(おっしや)つて(原文のまま、以下同じ)出て往かれた御様子がどうも不審だったので、人を付けさせて見たら、果して坊(まち)の小路のこれこれの所へおはひりになつたと云ふ事だつた。

やつ張さうだつたのかと、胸もつぶれるやうな思ひで、それからの數夜と云ふもの、私は寐(い)も寐(ね)られず、しかしどうしやうもなく一人きりで嘆き明かしてゐた。そんな或夜の明け方だつた。誰か訪れて来たものがあるらしく、しきりに門を叩いてゐるやうだつた。すぐあの方がいらしたのだと分かつたものの、私も少し意地になつて、いつまでも戸を明けさせずにゐた。やがて私の知らない間に、あの方はす(す)ごとお歸りなつてしまはれたらしかつた。おほかた小路の女のところへでも入らしたのだらうと思つた。が、朝になつて、何だかそのままにして置いても氣になるし、それかと云つて戸をちよつとお明けしなかつた間ぐらゐはとも思ふものだから、私は「嘆きつつ一人ぬる夜の明くるまはいかにひさしきものとかは知る」と、いつもよりか少しひきつくるつた字で書いて、萎れかけた菊に挿してやつた。

堀辰雄の穏やかな文章ですが、ほぼこんなところが、この歌についての『蜻蛉日記』の記述です。しかしそれは事實だつたのでせ(しよ)うか。この歌を収録した『拾遺和歌集』の詞書きは「かどを遅くあければ、たちわづらひぬといひいれて侍(はべり)ければ」となつており、戸を開けるのが少し遅くはなつたけれども、開けるには開けて夫を入れ、そのときにこの歌を示したことになる。少し拗ねて見せてはあますけれども、女の可愛い拗ね方です。『蜻蛉日記』の屈折とは違ひ(い)ます。どちらが事實だつたのでせ(しよ)うか。私はどうもこちらの方が事實であり、『蜻蛉日記』の方は、老年になつてから片意地を張つて事實を枉げたのではないか、と考えますが、如何でしょうか。

加藤淳平

文語の苑

メールマガジン第二十七号

この國(くに)ぶりの言(こと)の葉(は)に 愛國百人一首を讀む(二十二)

葦原(あしはら)やこの國(くに)ぶりの言(こと)の葉(は)にさかゆる御代(みよ)の聲(こゑ)ぞ聞(き)こゆる 小澤(をざ)は蘆庵(ろあむ)

豊葦原の瑞穂國の日本の國ぶりを表はす國の言葉や歌に接するにつけて、萬代(よろづよ)に榮える御代を讃へる聲が聞えてくるではないか「葦原や」の「や」は間投助詞で詠歎と強調を表現して、豊葦原の瑞穂國こそが「この國ぶり」即ち水田稻作こそが我が國の特徴なのだなあといふ氣分を表はしてあります。その國ぶりを表現してゐる「言の葉」即ち日本語の言葉、和歌そして文字にこもる言靈がすめら御國の御代を助け、幸(さき)ははせてゐることであるよ、となります。

我が國がらを謳つて餘す所がありません。ここに取上げられてゐる、水田稻作、國語、そしてすめら御國の三つは日本文化の基本要素であり、これらを全て一首の内に詠み込んだ蘆庵の見識は今日に通ずるものがあります。

よく日本文化とは何ぞやと問はれることがあります。此の場合、まづ文化とは或る共同体に特有のものであり、その共同体の成員全員が美しいと感じて、世代間を通じて、互ひの學習によつて傳承するものといふ理解の共有が前提となります。この定義に従へば先祖代々の家風、建學の精神に基く校風、會社設立以來の經營理念に由來する社風なども立派な文化と言へます。このやうな眼で日本の文化を見直しますと、蘆庵の指摘がまことに正鵠を得てゐることに驚かされます。

但し共同体が異れば異なる文化が生まれ、互ひの文化を尊重しつゝ折合を著けて行くことが求められます。このことは今日では文化の多様性尊重といふことで一般の理解が得られてゐますが、不幸なことに明治維新で西洋の文化に接して、その餘りにも絢爛たる「文明」の光に壓倒され、所詮敵はぬまでもと、日本文化こそ最高の文化とする國粹主義に走つて終に敗戦を迎へるに至りました。この文化に優劣を論ずる謂はゆる文化發展段階説は今では否定されてゐますが、我が國では戦後も大勢を占め、昭和二十二年制定の教育基本法の前文は「普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす」教育といふ明らかな論理矛盾を含むものでした。これが「傳統を繼承し、新しい文化の創造を目指す」教育と改正されたのは何と五十九年後の平成十八年のことでした。

これまで見て來ましたやうに、愛國百人一首に入つた歌には、一般に漠然と思はれてゐるやうな國粹主義や文化發展段階説の臭ひは殆ど感ぜられません。右の蘆庵の歌は少くとも江戸時代までは日本文化の本質が正しく理解されてゐたことを示してゐる、そのことを訴へたかつた撰者の思ひが籠められてゐると言へませう。

市川浩

文語の苑

メーラムガジン第二十七号

文語唱歌「寧樂の都」(高等小学唱歌)

明治二年、英國の軍樂隊長J.W.フェントン來日し、折からエディンバラ公の初の亞細亞訪問、來日決りたるため、國歌のなかりし日本のために「君が代」を作曲せるも、大山巖より受取りし羅馬字の歌詞にアイルランド民謡に近きメロディをつけたる曲なれば、かなり優雅なる曲とは聞かるれど、「キミ／＼ガヨ／＼ハチ／＼ヨニ／＼」なる日本語として不自然なるずれば、當時の日本人より不評を蒙れり。フェントン歸國後、海軍軍樂隊は獨逸よりF.エツケルトを招聘、獨逸式の様式をとる。君が代も應募作品より伶人の林廣守作選ばれ、最終的にエツケルトが吹奏樂用に編曲をなし今に至れり。エツケルト、フェントン同様日本語は解さざりしものの、日本を愛し、深く雅樂を研究したれば、日本人以上に古き日本音樂を理解せる伴奏をつけたり。日本にはいまだ西洋樂器のなきことより、東京藝術大學の前身音樂取調掛の伊澤修二の希望せる「東西二洋ノ音樂ヲ折衷シ將來我國樂ヲ興ス」べき方針をよく體し、「小學唱歌集」に伴奏譜をつけしときは、日本の傳統和樂器たる「箏」二面を用ゐたり。現在その意向に添ふる樂曲聞きつるは藍川由美氏のCDのみならむ。

ここに載する「寧樂の都」、作詞者作曲者共に不明なれど、長調なることはともかく、多くの他の明治唱歌のごとき七五調の歌詞とは趣を異にするが特徴なり。

一 75 / 75 / 774 / 74 / 67 / 77 / 775
二 75 / 75 / 774 / 74 / 67 / 77 / 775

中にも4拍のところあるは、短歌成立以前の古代歌謡を思はず。雅樂歌譜を意識せるか、懐かしさを感じさせる唱歌なれど、音數の變れるところより、歌ひ難きところあるを感ず。

一、ならのみやこの。そのむかし。

みやびつくして。宮びとの。

*みやび＝風雅

遊びましけん。龍田川原の。紅葉(もみぢば)。

*龍田川＝斑鳩から南下して大和川

たつたがはらのもみぢば。今もにほふ。

に流込む紅葉の名所

ちしほの色に。のこるかたみは。

*ちしほ＝血潮

千代もくちせず。今かいまかと。

君をまつらん。その紅葉(もみぢ)。

二、ふるきみやこの。そのむかし。

*ふるきみやこ＝天智朝の大津京

櫻がざして。おほきみの。

あそびましけん。滋賀の花圃。はなさき。

しがの花ぞの。花さき。今もにほふ。

色香をそへて。ゑめる姿は。

*ゑめる＝笑める

ちよもかはらず。今やいまやと。

行幸(みゆき)まつらん。その花は。

谷田貝常夫

文語の苑

メールマガジン第二十七号

聲調と平仄

漢詩には「平仄（ひやうそく）」といふものがあつて、「字の位置によつて、アクセントの決つた漢字を持つて来なければならぬ」といふことを若い頃に習つたものでした。

アクセントには、「平上去入」の四つの區別があるといふことも、受験生レベルの知識です。

一方、現代中國語にも、四つのアクセント（聲調・四聲）があります。「第一聲」「第二聲」「第三聲」「第四聲」に分れます。

前々から、「平上去入」と「四聲」の關係について、疑問に思つてゐましたが、愛甲次郎先生の名著「世にも美しい文語入門」で、そのヒントになるお話を拜讀して、ちよつと調べてみました。

まづ、「平上去入」の下に「聲」を付けた場合、読みは呉音になります。「聲」は「せい」でなく「しやう」。「平」も「へい」でなく「ひやう」。「平聲」ひやうしやう（「上聲」じやうしやう）（「去聲」きよしやう）（「入聲」にんしやう）と讀むのです。

「聲調」と「平上去」は、次のやうに對應します。

第一聲 陰平（平坦なアクセント）

第二聲 陽平（上昇調）

第三聲 上聲（一旦下つてまた上る）

第四聲 去聲（下降調）

「平聲」が「陰」と「陽」に別れ、それが第一聲と第二聲になつたのです。もともとは、「平聲」は現代中國語の第一聲（陰平）と同じ平坦なアクセントだけだつたのに、後から上昇調が生じて、それが第二聲（陽平）となつて分離したのだと考へる學者もあるやうです。

「上聲」は、名前だけから判断して、低から高へと上がる第二聲のことだと誤解してゐる人が多いやうですが、實は一旦下つてからまた上がる第三聲のことなのです。

「入聲」は、現代中國語（北京語）では消滅してゐます。

これは、*p・t・k*といふ破裂音で終る音のことです。頭子音を除いた部分だけを見ると、*かふ*（*at*）*罰*（*ぼつ*）*く*（*at*）*卓*（*たく*）*く*（*it*）*急*（*きふ*）*く*（*it*）*菊*（*きく*）などです。字音では「ふ」「く」（「ち」「き」になる場合もある）で終る字です。母音が短いので、アクセントはないと言つてもよいでせう。その、アクセントのない音を、「入聲」としてまとめて分類したのです。

*p・t・k*の音は、直後の子音（特に破裂音の *p・t・k* やそれに近い *s*）とくつついて、促音を作ることが少なくありません。

「合體」は「合」後ろに *t*（體）が来てゐますので、*de* の *p* が *t* と連結して、促音を作り、「がつたい」といふ發音になりました。

「入聲」の讀みに、「にんしやう」と促音が現れてゐるのも同じ理窟です。「入」の字音も「にふ」なのです。（漢音「じふ」、呉音「にふ」、慣用音「じゆ」）

現代中國語では、廣東・香港などの南方方言に、「入聲」が残つてゐます。

一方、「合」の音は「かふ」だけでは『あふ』と表記しました。そして、語中の *h*（*f*）が原則としてサイレントになつたために、「がう」となり、「おらた」「つ」と發音されるに至りました。そこで、「合理」は「がふり」といふ假名遣で、「しり」と讀むのです。

文語の苑

メールマガジン第二十七号

p・t・k以外でも、sはまだ破裂音に近い要素（強さ）がありますので、「ソにつしやう（入聲）や「ガがつさく（合作）」といふ促音の讀みが生じましたが、「合理」の場合は、「理」の「リ」（中國音では）は破裂音と違ひ過ぎるので、「フ」が促音化することができませんでした。

漢詩には「平仄」といふものがあります。「平聲」を除いた「上去入」をまとめて「仄聲」と言ひます。これは「そくしやう」ではなく「そくせい」と讀むのでややこしい。

例へば、七言絶句では、第一句（四行のうちの第一行）の七つの文字のうち、二番目の字と六番目の字は平仄が同じでなければならぬ。つまり、二番目の字が「上聲」（仄聲の一）だつたら、六番目の文字は「上・去・入」（つまり仄聲）のいづれかでなければならず、「平聲」にしてはいけない、などといふ規則があるのです。

更に、二番目の字と四番目の字は、平仄が違つてゐなければなりません。二番目の字が「上聲」だつたら、四番目の字は「平聲」でなければいけない、といふ意味です。

さらに、奇數句から偶數句へ（第一句から第二句へ）移るときは、七漢字全てについて、平仄を逆にしなければならぬなどと厳しい決まりがあるので、「漢詩を作るのは難しいんだなあ」と感心させられます。

田中角榮氏は、初めて北京空港に到着したとき、韻にも平仄にも全く捉はれない、大膽不敵な漢詩を披露して、中國人の度肝を抜きました。流石は昭和の大宰相です。

七言絶句の場合、第二句（二行目）の末尾の字と第四句の末尾の字が韻を踏まなければなりません。第一句も韻を踏んでゐることが多いのですが、さうでないといけなわけではありません。

韻は「平聲」で踏むのが原則です。その場合、韻を踏まない句（第三句など）の末尾は「仄聲」にしなければなりません。

漢詩の實例くらゐは擧げて説明した方がよかつたかも知れませんが、とりあへず、おほまかな所は分かつていただけただけではないでせうか。

高田友

文語の苑

メールマガジン第二十七号

セビアの窃盗

何十年も昔、親友と南スペインを旅したりしをり、窃盗に遭遇せり。今はすでに存在せぬイベリア航空にてマドリッドよりスペインへ入国。プラド博物館など観光スポット巡りし後、トレドを訪るバスにて訪れたり。トレドは外部より車進入不可のため、高き城壁の中に町ありて、趣きあり。エルグレコの生家訪れ、絵画観て廻りき。年を経てグレコの宗教画徐々に狂気帯びてありと吾には思はれき。さらに、汽車とバスを乗り継ぎてアンダルシアへ至る。グラナダにおいては修道院の運営したるホテルに宿泊を希望したれども、一年以上前に予約するにあらざれば不可なりと聞き、已むなく城壁の中の古きホテルに宿泊せり。アルハンブラの宮殿終日観光し、疲れ果てたれど、そこでポルターガイストに遭遇したりき。まづ水道の蛇口勝手に全開になり水ジャージャー流れ、その後洋服ダンス倒れんばかりにガタガタと動き、中よりネズミ何匹も飛び出づるにあらずやと思ふほどの音鳴り響き、とどめはベッドなき窓の方より寢息聞ゆまたは聞え來たるといふ身の毛もよだつばかりの経験をしたりき。翌日はアルハンブラを後にし、バスにてコルドバへ向ひき。モスクの上にカテドラル建ちたる「教会」には感銘受たり。街全体迷路のごとく細き小路通りありて、いたるところに鉢植ゑの花あり、綺麗なる街なりき。親切なる初老のおやぢさんはいはく、「日暮れなば外出すべからず」と言はれ、かくのごとき閑静なる町にてかかる危険のあるらんかと驚きたり。翌日セビアに到着。夕方ホテルチェックインし、食事をせんと歩み寄りたりしとき、前よりジブシー風の青年現れ、ハンドバッグひったくろうとしたるによりて、抵抗したる末に右肩脱臼。身動き取れず、親友必死にそのひったくり乗りたるバイク追ひたれど当然のことながら見失ひき。パトカー到着し、警察に連行せられて、質問を浴びせられたり。英語に片言のスペイン語を混へて応答せり。ホテルより東京に電話入れ、クレジットカード停止せしめたり。イベリア航空に電話し、航空券再発行せしめ、更には朝日新聞のロンドン駐在特派員および東京本社を経済部長に電話入れ、外務省本省に連絡しマドリッドの大使館にてパスポート発行一日にて行ふべしとの指示を發して下されんことを依頼せり。翌日マドリッドへ戻り、大使館に出向き、パスポートの申請したれば、即日発行の運びと相成り、予定通りの便にて東京へ帰着せり。親友朝日にてあり、東京へ戻り出勤すれば、すでに多方面より情報入り、赤谷パスポート等窃盗犯にとられしかば、帰国遅遅るかといふ話になれど、彼女のことなれば多分予定通りに帰国するならん、とこもこも噂あり。かくも強気にして強引なる女なりと思はるか我が身を顧みるの思ひあり。

赤谷慶子

文語の苑

メールマガジン第二十七号

地震の日

平成廿三年三月十一日金曜日、氣功教室に出席せんとて櫻新町に赴けり。午後三時の教室開始より稍早めに到着、駅の雪隠にて用足しの最中、激しき揺れ長く続きぬ。「関東大震災の再来、遂に来たるや」と覚悟せり。個室を使用中なれば先づはドアを開け避難口確保せんとす。されど車椅子使用可能なる所謂多機能トイレ使用中なればドア離れ居り手届かず。此儘雪隠詰めて死に度は無し。便座に坐りたる姿にてポンペイの化石宛ら後世博物館の一展示物と成るは哀しと、甚く狼狽せり。

廁幸ひ崩壊せず無事脱出せり。東急田園都市線不通となりぬ。自宅に電話すれども通ぜず。辛うじてメール通じ、家族の無事確認。取敢へず氣功教室に赴きぬ。

生徒四人出席。先生三時半になりても到着せられず、連絡だにする能はず。事務方曰く、「取敢へず開始せられたし。」暫く稽古するも、電車の運行状況不安なり。稽古は取止め解散、櫻新町驛にて状況を問ふ。運行回復見込み立たずとの事なり。

さればとて、徒歩にて自宅へと向ふ。暫く行くに支那料理屋有り。未だ閉店せざる裡にと思ひて、先づは腹拵す。景氣附けなる生麦酒も一杯注文せり。

徒歩続行。用賀驛にて憚り使用。更に歩み行かば次は二子玉川なり。多摩川を渡り、旧大山街道を歩みぬ。二子新地、高津を過ぐれば、溝口なり。JR南武線は既に本日の運行中止と発表あり。バスは運行中とて、新横濱行の長蛇の列に並びぬ。バス一向に來らず、日も暮るれば寒さ一入なり。半時間後バスをば諦め、近隣のホテルを覗きしも、既にロビーまで帰宅困難者満ち満ちり。空のタクシー有りされど一足違ひにて乗るを得ず。更に横濱方面へと田園都市線沿ひを徒歩にて行きぬ。歩行難民の数、増えつつあり。道、線路より逸れたり。後を歩いてありし人、問ひて曰く、「此の道、何処へ通するや。」我答へて曰く、「我も知らず。斯くも多くの人行く道故、何処へかは通するものならんや。」皆、結構呑気なり。

梶ヶ谷驛のバス乗り場にて、動き始めたる鷺沼行バスに手を振りて飛び乗り。途中、信号機点灯せず。停電なり。バスは無論満員なり。二人席の通路側に腰掛けたる背広の紳士、某電鉄会社のロゴ入りヘルメットを窓側の空席に置き平然たる様子なり。咎むる者無し。電鉄会社の印象低下せざるを得ず。

鷺沼驛到着。センター南行は既に最終バスの出でたる後にてセンター北止りとなりぬ。センター北より仲町台なる我家へは徒歩半時間前後と思へり。一安心なり。夕食早めに取り、且つ常になく長く歩きたる為、空腹を感じ。驛近くのフードコート、閉店寸前なれど辛うじてラーメンにて腹を満たすを得たり。座席は忽ち満席となり、此処にて一夜を明かす覚悟の人も多しとぞ思はるる。

約廿五キロ、五時間を要して三萬五千歩を歩き、バス二本乗継ぎて、やうやく十時前には自宅に辿り着きたり。忘れ得ぬ一日なり。

仲紀久郎

文語の苑

メーラムガジン第二十七号

返哺（注）参照）

余が母、齡九十七にして漸く生命に衰への兆し有り。大正五年の生まれなれば、大正八年の本邦におけるスペイン風邪流行を乗越えたること特筆すべし。以後、金融恐慌、大東亜戦争などの大事は社会の経済力低下を介して衛生状態劣化をもたらしたるにこれをも乗越えたることは、本質的に丈夫といふに相応し。

九十五歳にて慢性硬膜下血腫なる頭蓋内の静脈出血を契機に歩行不能となりぬ。慢性硬膜下血腫は固より外傷に起因すれば、丈夫なる体質を持ち合わせりしもこれを避くるに如何ともしがたきことなり。

施設にて、食堂に出でて他の老人たちと毎回食事を共にするだけの元気はあれど、年余を経て次第に咽すること多くなりぬ。固形物はほぼ普通に摂り得るに、液体にむすること甚だしく、お茶の一杯もとるみを付けて漸く飲まるるやうになりけり。さらには食における執着の薄ること、名調理人として家族の賞賛を得たりける人生からは想像し難き事実なり。

叔（さ）ても斯（ここ）に初めて余の出番が初めて現出とはなれり。病院にありては看護師の言ふに、御長男の一匙に開けたる口の上下の幅は我らの倍はあらむかと。

約一時間をかけて漸く完食に至るが常なれば、中途にて寝めたり、宥めすかしたり、上手く喉元を過ぐればやれやれと思ふに、なるほどこれらすべて母がかつて余を育てたる折になしたることに同じと氣付きけり。これを返哺といふのも初めて知りたり。

（注）反哺（はんぼ）鳥（からす）が生まれて六十日間母に哺育せられ、長じて母老ゆる時、子鳥反哺して母を養ふと言ふ。梁武帝孝恩賦に曰く、

靈蛇含珠以報酬德 慈鳥反哺以報親。

靈蛇珠を含ませて以て德に酬（むく）い 慈鳥哺を反（かへ）して以て親に報ゆ。 慈鳥鳥也

靈妙な蛇には珠を含ませてその德に酬（むく）い 慈鳥即ち鳥は親に報いるに哺を反（かへ）す

中島八十一

文語の苑

メールマガジン第二十七号

巴里の二つ星レストラン(一)

(注記) 飽くまでも二十年前(平成五年)の手記をもとにして、その文語化を試みたるものなれば、最新情報には非ざる点、留意せられたし。

MIRAVILLE (ミラヴィル)

四区。二十一世紀の三つ星レストランかと見紛ふばかりに、どの皿一つをとりにても創意工夫に満てり。アンプロワジーと同様野菜をば効果的に使用す。特別定食は、たとへば、ベニエ・ド・フォアグラ。球体のコロツケの如く見ゆ。オマール海老と蕪の組合せ。川魚と丸ベーコンの香料入りマヨネーズ和え。野兔とフォアグラ、トリュフを用ゐる伝統料理なる具合にて、シェフの才気迸れり。

BOURDONNAIS (ブルドネ)

七区。かつて日本人シェフの活躍したる店。良心的なる値段にて料理も真つ当なり。日曜日も営業する貴重なる店。

TOIT DE PASSY (トワ・ド・パシー)

十六区。テラスよりの眺め頗る佳し。マグナム瓶のワインを多数取揃へたること印象に残れり。料理は、たとへば、蟹のミルフィーユ、至極美味なりき。座席によりては巨大なる花瓶に挿したる花束、客人の頭に触れ邪魔と感ずることありき。

BEAUVILLIERS (ボーヴィリエ)

十八区。料理評論家増井和子さんの名著「パリの味」の表紙を飾る美しき名店なり。花の飾付けの美しさに於いては巴里随一と覚ゆ。特に女性客に向く。ワイン付昼食は三百フランにて費用対効果よし。

DROUANT (ドゥルアン)

二区。日曜日に営業するレストランとしては最も高級なる店の一と言ふべし。ゴンクール賞の選考委員会に使用せらるるサロンは有名なり。料理は魚介類を中心として一定の水準を維持す。

LATABLE D'ANVERS (ターブル・ダンベル)

九区。印度料理に似てスパイスをふんだんに使用するの特色之有り。

LES ELYSEES (エリゼ)

八区。最近飛ぶ鳥を落とす勢ひのある店と言はる。南仏料理の影響大と覚ゆ。伊太利風の長き看板目立つ。

LES SORMANI (ソルマーニ)

十七区。巴里一番の伊太利料理店なりとの評価定着せり。店の雰囲気華やかにてテレビ関係者の屢々訪問するとの噂あり。確かに見目麗しき女性客目立つ。白トリュフの定食など豪華絢爛極まり無し。カルパッチオ、セップ茸のラヴィオリ、白トリュフのタリアテッレ、ティラミスといふ構成。白トリュフは目の前にて客の為に削る方式なれば演出効果高し。

FAUCHER (フォーシェ)

十七区。一度のみ訪ひたれど、さしたる印象之無し。

LEDOYEN (ルドワイヤン)

八区。シャンゼリゼ近辺にては格別の場所に立地し、老舗レストランとの評判を恣にす。ただし、夏の暑き時期に冷房なく閉口したる経験あり。最近リールの評判の二つ星女性シェフ(アラビアン氏)が移り來りて今後の活躍大いに期待せらるるところなり。

OPERA (グランド・ホテル「オペラ」)

老舗グランド・ホテルのレストラン。ガルニエ設計の天井は超豪華にて、雰囲気は抜群なり。昔は溢澤榮一も宿泊したる場所なり。バカラ、クリストフルなどの高価なる食器類には痺れを覚ゆ。ワインも甚だ良し。値段は当然のことなれど決して安からず。